

アルバート・Y・ヒュー著・佐藤知津子訳

「あなたをひとりで逝かせたくなかった」

評・久保木 聡 (日本ナザレン教団鹿児島教会牧師)

●本書について

著者は、中国系アメリカ人のクリスチャンで、自身が20代で新婚の時に、40代後半の父親を自死で失いました。本書は、父の自死以後における著者の「悲嘆とその癒しの旅路」が描かれたものです。

●重く苦しい「悲嘆の旅」

旅行記を読むとき、単に感想だけが綴られたものもあれば、古今東西の様々な文献からの引用や考察が描かれ、単に旅行しただけでは学べない豊かさに触れるものもあります。本書は、とある自死遺族による「心の旅行記」とも言えます。悲嘆の旅路で遭遇する様々な思いに、聖書や多数のキリスト教著作からの引用やその考察が含まれ、愛する人の自死をどう受け止めていくかが丁寧に描かれています。

その一例を挙げるなら、著者は、自死遺族は愛する人の自死をなぜ未然に防ぐことができなかったのかと罪責感にとらわれやすいことを語ります。そこで、悔い改めと赦しに導くものが良い罪責感であり、理不尽な悪い罪責感と分けて考えることが必要であると述べます。そうして、罪責感への適切な姿勢が解かれています。

このように「悲嘆の旅路」をよくわからないまま生きるのでなく、聖書に聞き、先人に聞き、受け止めていく知恵の源泉が本書にはあります。各章のタイトルに「衝撃」「混乱」「嘆き」「あきらめ」「追憶」などがありますが、それぞれ状況に適した洞察が盛り込まれています。日本社会は死を忌み嫌う分、死への洞察が乏しくなりがちです。しかし本書は死また自死への適切な洞察へと促し、不必要に心をかき乱すことから私たちを解放することへと導きます。

●キリストの傷の意義

著者は、自死から完全に回復することは決してないと言います。本書は安直な解決を描きません。しかし、そのことがかえって、キリストはなぜ手や脇腹に傷をもったまま復活したのかを指し示しているように私は思われました。私たちは完全に回復することはなくとも、傷ついたまま復活の人生を生きることができるとは

傷があるゆえに、悲嘆にくれる人々をもっと理解し、思いやりを深めることができることを本書は語ります。

●自死遺族と無縁だと言えるか

本書の中の引用に「自殺は苦しみを終わらせはしない。打ちひしがれる遺族に、その苦しみを肩代わりさせるだけだ」「愛する者を自殺によって失った場合にこうむるストレスは破滅的レヴェル——強制収容所暮らしを経験するのにほぼ匹敵する——に達するとされ

ている」とあります。これらは自死遺族が背負う苦しみがどれほどのものであるかを教えます。

日本では、年間3万人以上の人々が自死で亡くなっており、そのことが12年続いています。単純に計算するなら、この12年に36万人以上が自ら命を絶つたことになり、その遺族の数を考えるのなら、何百万人もの人となります。愛する人の自死ゆえに強制収容所暮らしに匹敵する悲嘆の中にある人が日本にどれほどいるのか——私たちはそのことに気づく必要があります。

著者は自死遺族に向けて本書を執筆しており、そのような方にとっていただきたいのはもちろんのことですが、現代日本に生きる人は必読の内容でもあります。

「あなたをひとりで逝かせたくなかった」

いのちのことば社 270ページ 1,890円(税込み)

*FFJでは、お取り扱いしておりません。

